
今でも世界一愛してるよ・・・

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今でも世界一愛してるよ・・・

【Nコード】

N5016Y

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

ある日、私、水田沙希は学校の帰り、雨が降っていてどうしようか、

迷っていた・・・

その時、ある男子に

傘を渡され、戸惑いながらも、その傘を使い帰った

そして、それが恋の始まりだった・・・

そして時はたち

私はあることがきっかけで、私はその男子と付き合い、

そして、結婚する・・・

だが、あることで、離れ離れになってしまふ・・・

沙希はどうするのでしょうか?!

く 出会い く

私の名前は、水田沙希（みずたさき）

私は、前、私には旦那がいたんだけど・・・

あることがきっかけで、今は一緒に暮らしてはいないんだ・・・

今から、あなただけに、こっそり教えてあげるね

それはいまから10年ぐらい前のことだったかな・・・

その日、雨がふっていたんだけど、傘がなくて

困ってたんだ・・・

「どうしよう・・・傘がないし、ケータイもこんな日にかぎって忘れちゃったしなあ」

そのとき後ろから男子に声をかけられて・・・

「傘・・・使えよ」

「え？」

「使えって」

「で……でも……」

「いいから!」

そういつて走って帰っちゃったんだ……

その男子は学校のなかでも、すごい不良でうわさになってる人だったんだ

「あ!ちよ、ちよっと…… どうしようっ、」

結局私はその傘を使って帰ったんだけど

それが、私の恋の始まりだったのかもしれない……

〜次の日〜

(ムムムム)

「しるさいなめ」

「……」

「沙希〜!起きなさいよ!」

「……」

「もっ!」

「……あ!今何時?」

でも、そんなこと考えてたら渡せないし……

「あ、あの」

すると、男子達がいつせいに私の方を見てきた

き、緊張するなあ

「あの、昨日は傘、ありがとう……」

「ああ、昨日の、別に返してもらわなくてもいいんだけど？」

「で、でも……悪いから」

「いい、いらねえ」

そういつて行ってしまった……

「……なんなの?！」

人がせつかく返すっていつてんのに!」

(キーンコーンカーンコーン)

「ああ!やばい!」

結局私は遅れて、みっちり怒られた……

「あいつ……このやるお……」

そうそう、言い忘れてたんだけどね、

その男子の名前は

藤崎永久（ふじさきとわ）

ちよつと変わった名前かな？

「はあ、遅れたのなんて、初めてだよ……
あんなやつ、待たなきゃ良かったのかな？」

「おい沙希ちゃん
珍しいこともあるもんだねえ、明日は雪でも降るんじゃない？」

この子は私の親友、

霧之楓ちゃん（きりのかえで）

大の仲良し

「もう、最悪だよ」

「なに？何か理由でもあるの？」

「うん……まあね」

「なにになに？」

「えつとね……昨日、藤崎君に、傘貸してもらった……とい
うか、

強引においていかれたんだけど、それで、傘を、返さないとな

と、思って待ってたら・・・」

「こうなっちゃったわけねえ」

「うん」

「でも、珍しくない？藤崎君がそんな優しいようなことしてくれるなんて・・・」

「そうだよねえ、正直私もビックリしたんだけどね」

「でも、一部の女子が、藤崎君って、意外とやさしいよねって、話してたような・・・きがする」

「そうなんだ、でも、どうしよう？
やっぱり返したほうがいいかな？」

「もういいんじゃない？藤崎君が返さなくていいって言うてんだか
」

「そう？じゃあいいや」

「うんうん、そうしなよ」

(キーンコーンカーンコーン)

「あ、授業始まるよ！」

「本当だー！じゃ、ばいばい」

「うん、ばいばい」

↳放課後↳

「速く帰って寝よ、疲れた」

「あ、藤崎君だ、どうしよう・・・」

楓ちゃんには、もういって言ったけど・・・

もう一回言ってみようかな？」

「ね、ねえ」

「ん？」

「傘・・・本当にいいの？」

「ああ、まだきにしてたのか、もういって

「本当に？」

「ああ」

「・・・ありがとう」

「別に」

「えっと・・・えっと・・・」

(どうやって分かれよう?)

「じゃ、俺帰るから」

「あ、うん」

「はあ、緊張したなあ、でもこれで、藤崎君に、話すこともないわけだし・・・」

良かった」

（夜）

「はあ、今日はやけに緊張したなあ

でも、明日からは話さなくても良いし、早く寝よう」

—————。o* *o。—————

ねえ、

アナタはまだ私のこと覚えてくれてる？

私はあなたのことを、一日も忘れたことはないよ・・・

あの、傘も、大事にとってるよ、

いまでも、愛してるよ・・・

～恋の始まり?～

～朝～

(プンプン)

「ん?もう朝かあ～今日は時間もたっぷりあるし、ゆっくりご飯でも食べよう」

「沙希」

「何?お母さん」

「きょうねえ、お母さん朝から仕事になっちゃったから、朝ごはん自分で適当に作って食べてくれる?」

「ええ～今日こそはゆっくり食べようと思ったのに」

「ごめんね～あ!もうこんな時間!じゃあ、いってくるから」

「はあーい、いってらっしゃーい」

「はあ、何作るの?」

「って、もうこんな時間になってるし!」

「パンでも焼いて食べよう」

「ああ〜そうだ、誰もいないだった・・・いつてきまあ〜す」

〈学校〉

「楓ちゃ〜ん」

「あ、沙希ちゃん、おはよう」

「うん、おはよう！ねえ、楓ちゃん見なかった？」

「今日ね、楓ちゃん休みなんだって」

「えっそうなの?!そっか〜、ありがとう」

「うん」

〈教室〉

「ああ〜あ今日は話す人がいないなあ」

(キーンコーンカーンコーン)

「あっ先生だ」

「ちょっと先生忘れ物してきつちやたから、・・・水田さん、ちよつと職員室に

取りに行つてくれない？」

「え〜先生自分で取りにいかないんですか？」

「うん、お願い！取ってきて？」

「はぁい」

「なんで私が・・・」

(ドン)

「キヤッ、ごめんなさい！大丈夫ですか？」

「ああ、別に、」

「？あ、藤崎君・・・って、今授業中だよ？こんなところで何してるの？」

「藤崎！！」

「チッ、ちよっと、こっちはいい」

「え？ちよ、ちよっと！！」

「静かにしろ！」

「！！」

「逃げ足だけは速いやつだ！」

そのとき、私は口を押さえられていた

「ん〜！」

「あ、わりい」

「はあ、何で逃げてるの？」

「は？今授業中だぞ？」

「え？・・・あつ私先生に頼まれごとされてたんだった！！
じゃ、もう私いかないとだめだから！！」

「ちよつと、」

「？」

「巻き込んで悪かったな」

「！！い、いいよそんなこと、じゃ」

〈教室〉

「はあ、はあ、先生とつて来ました！！」

「水田さん、だいぶ遅かったのね」

「え？あ、えつと、それは・・・その〜、すみません！」

「まあいいわ、とりあえず、座ったら？」

「あ、はい」

くお昼休み（屋上）く

「はあ、なんか今日はついてないなあ、お昼ご飯も一人か」

「永遠、お前好きなやつが出来たって本当か？」

「ま、まさか・・・」

その集団は、そのまさか、藤崎君の集団だった

「なんか嫌だなあ、隠れて食べるところかな」

「なあ、教えるよ」

「お前らには関係ねえだろ」

「いいじゃねえかよ」

「はあ、耳貸せ」

（コンコン）

「マジかよ！！みずたさ・・・（フゴ）」

「うるせえ、聞こえるだろうが」

「す、すまねえ、でも、お前もまた、レベルのたけえやつ選んだな」

「う、うん、今きたから・・・あはは」

「それならいいけど、お前「うちこいよ」

「え？い、いや、いいよ、いいって・・・」

「お〜い永遠〜」

「？」

「水田さん連れてきたぞ〜」

「はあ？」

「ど、ど、ど」

「・・・」

「おい、永遠、どっした？」

「い、い、い」

「（〜）（〜）」

「なんだよ、まさかの緊張してるとか？」

「は？そんなわけねえだろ、てか、なんでこいつつれてきたんだよ」

「（〜）（〜）（〜）（〜）（〜）」

「え？いや、わかってんだろ」

「はあ、まったく・・・」

「あのさあ、私・・・じゃまでしょ？どっかいくから、じゃあね」

「おいおい、まってくれよ」

「何言ってるんだ、水田もこんな男ばつかのところにいたら、つまんねえだろ？」

「い、いや・・・別にいいけど・・・じゃまかな？と思って・・・」

「永遠やつさしい〜」

「おい、ばかにしてんのか？」

「いえ〜別に」

「あの〜いつでもいい？」

「まってくれよ、俺達も男ばつかで、つまんないんだからさあ、一緒に食べようぜ」

「え、わ・・・分かった」

「はあ、わりいな」

「いや・・・いいよ全然・・・（意外と藤崎君って、やさしいのかも）」

「

くお昼休み終わりく

「あ、もうこんな時間が、水田さんは、授業いくんだよな」

「え？うん・・・は、ってどづいづいと？」

「俺達が授業に出ると思う？」

「まさか・・・参加しないの？」

「まあな」

「おい、あんまり言って先生に言われたらまずいだろ」

「そうだな、じゃあな〜また一緒にたべようぜ」

「え・・・う、うん」

く放課後く

「なんか・・・今日はいいことなかったなあ・・・あ！そうだ、
楓ちゃんの家によって帰るぞ」

く楓の家く

(ピーンポーン)

「はい」

「あ、水田ですけ」「あ、沙希ちゃんね、楓？」「

「あ、はい」

「ちょっとまっててね」

「（私まだ水田ですけどどしか言っただけなのに・・・よく分かったなあ）」

（ガチャ）

「あ、沙希ちゃん、どうしたの？ゴホッゴホッ」

「えっとね、楓ちゃんのお見舞いだよ」

「ありがとう」

「大丈夫なの？」

「うん、ちょっと風邪ひいちゃって・・・でも、明日はいけると思うから」

「そうなんだ、よかったあ」

「まあ、あがりなよ」

「うん」

「おじやましませーす」

（楓の部屋）

「そっだ、ちよっと・・・相談があつて・・・」

「何？どうしたの？」

「あのね、今日屋上でお昼食べてたら、藤崎君の集団が来て、でね・

・・・あの、

す・・・好きな人が・・・

「

「え？なに？」

「あ、あのね、好きな人がい、いるんだろって言ったの・・・」

「うん、それで？」

「そ、それでね・・・コソコソ言ってるな〜と・・・思ってたら・・・

あ、あの、そのおみずたさって言うてて・・・それって・・・私
じゃない？」

「た・・・確かに・・・じゃあさ、沙希ちゃん的には、どうなの？」

「なにが？」

「その、藤崎君のことどう思う？」

「うん、不良だけど・・・やさしいかなあ？」

「そうじゃなくて！好きかどうかだよ」

「ええ！そうだなあ・・・私は・・・好きじゃないかな・・・」

「じゃあ、もし告白されたとしても、ごめんなさいって言えばいいんじゃない？」

「ま、まあね・・・あははは」

「まあ、沙希ちゃんの、思う次第だよ」

「そうだよね・・・ありがとう」

「うん、いいのいいの、頑張つてね！また、何かあったら相談の
るから」

「うん、ありがとう！楓ちゃんに相談したら気持ちが悪くなった
よ」

「そう？良かった」

「あ、じゃあ私もこんな時間だし、かえるね」

「うん」

「じゃあ、また明日！バイバイ」

「バイバイ」

〜夜〜

「はあ〜、藤崎君かあ・・・」

「てか、今日は藤崎君のことばかり考えてるし・・・」

「う〜ん・・・もうっ！藤崎君が頭から離れない〜
なんか・・・今日の私変かも・・・」

「沙希〜早く寝なさいよ〜」

「はあーい」

—————。o* *o。—————

このときから私はあなたのこと、

好きだったのかもね・・・

あなたはとうだったの？

私は、自分の気持ちに気づいてなかったんだね・・・

もっと早く気づいていれば・・・

私がこんなに鈍感じゃなかったら、

もっと多くの時間をあなたと一緒にすごせたのにな・・・

ごめんね

もういちど・・・

もういちどだけ、あなたに会いたいな・・・

—。 * *。 —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5016y/>

今でも世界一愛してるよ・・・

2011年11月23日23時55分発行